

\*\*\*  
 カットした原稿その1  
 『京介と黒猫が『持ち込み』をしたシーン。ここでムカつく編集者が来た場合』  
 \* \* \* \* \*

編集部の扉が再び開いたのは、そんなときだ。  
 もちろん俺たちのいる席からは見えないので、扉が開く音が聞こえただけだった。  
 どたとと早足で近づいてくるような気配がして――  
 「いやァ、遅れた遅れた！ サーセン！ 新宿駅付近でも職質されちゃってさあ！ い  
 い加減サツどもに『僕ねえ、このへんでポリに引き留められるのこれで四度目なんスけどァ』っ  
 てメンチ切ってやったの。そしたらどーも付近の警察署に引出っているヤクの売人の人相書き  
 が、僕そっくりらしくてさあ。チョーびっくりした。生き別れの兄貴かと思っただもん」  
 さすがに振り向いたね。  
 懐に色んなブーツを隠し持てそうな黒いジャケットを着た男。スーパーサイヤ人みたいな金色  
 の髪の毛がやけにまばゆかったのを覚えている。えらいチャラ男がそこにいた。

チャラ男は喧嘩でも売るような目つきでゆっくりとブースを見渡し、最後に大口開けて見上  
 げている俺をじろりと睨むと、片手を挙げて軽薄な挨拶をした。  
 「ウイッス。お疲れッス」  
 これってギャグなの？  
 おそらく全員の頭にどういうリアクションを取ればいいのか、疑問符が浮かんでいたことだ  
 ろう。結論から言うと、それはギャグでも笑いどころでもなかった。  
 徹夜明けのような顔つきとか、きんきら金の髪の毛とか、とにかくバツと見死ぬほどさん  
 くさいが、なんとこの人も編集者だったのだ。  
 沈黙の妖精が三十秒ほど周囲を飛び回り、やがてヘンクツさんがためらいがちに男を紹介し  
 て、白くなっていた空気はようやく正常化した。  
 「えーと……こちら、編集者のライトニングです」  
 「どーもこんにちは！ いや、若いなあ二人とも！」  
 なるほど髪型がライトニングだった。実に分かりやすい由来である。  
 「……ども、高坂です。よろしくお願します」  
 「……よろしくお願します」  
 俺も黒猫も、ド派手に登場したチャラ男に若干引き気味ではあったが、とりあえず無難に挨拶  
 をする。するとジャケットを脱いで身軽になったライトニングさんが、さっそくデスクに近

づいてきた。机上にはホワイトボードが載っており、黒猫とヘンクツさんがネタ出しをした必  
 殺技のネーミングが、いくつも書き殴られている。  
 「あー！ これこれ、これさあ！」  
 ホワイトボードからある必殺技名を指差し、堪えきれなくなったようにフハッと噴き出す。  
 「この邪眼に侵されたネーミングセンスめっちゃバツッよ！ “真魔滅殺波”って！ いまま  
 で見た中で一番ひどい！」  
 「それほくが考えたやつ」  
 ヘンクツさんが無表情になった。  
 うおお、すげえ気まずい……！  
 「え？ 何コレ、ヘンクツさんが考えたの？ ハハ！ ダメダメだなあ！ ヘンクツさんは！」  
 同僚の背を茶化すように叩くライトニングさん。  
 フォローとしては間違いない最悪の部類だった。俺がこれやられたら落ち込む自信あるよ。  
 ……ていうか、この人、本当に編集者なのかな……。いままでに見てきた中で、一番編集者  
 つほくないというか、むしろ社会人つほくないんだけど。独特のハイテンションに、なんと  
 く薬物の影響が見え隠れするんだよ。これは職質されるわ。

「投稿歴の長い歴戦のワナビさんが、小説投稿サイトとかでは人気が高いのに、なぜか新人賞  
 に通らない原因つてのは、このへんにあることが多いです」  
 ヘンクツさんは、ぼつが悪そうに言った。  
 「……しかし、私は……こういう方向性のものを、いままで目指していたんですけれど」  
 「フーン、同人誌でやれば？」  
 にべもねえ！ 何コレ、作家つてこんなことばっか言われる仕事なわけ!?!  
 中学生相手に容赦のかけらもないライトニングさんだった。  
 「僕らが作ってる本つてのは商品なんですよ。なのに、そこでカンケーない話されても困るん  
 ですよね。やりたいことがあるなら、それをどうやって売るのが、どうやったら売れるのかと  
 いう相談をしましょう。単なる趣味の話ならプライベートでお友達とやってください」

「……………」  
 黒猫はほとんど表情を動かさなかったが、眉をわずかにひそめ、険を強くしている。  
 内心ではハラワタにえくり返ってるんだろな……。視線に憎悪を感じるもん。

\*\*\*  
 カットした原稿その2  
 『京介と黒猫が『持ち込み』でムカつく編集者に批評された場合』  
 \* \* \* \* \*

「投稿歴の長い歴戦のワナビさんが、小説投稿サイトとかでは人気が高いのに、なぜか新人賞  
 に通らない原因つてのは、このへんにあることが多いです」  
 ヘンクツさんは、ぼつが悪そうに言った。  
 「……しかし、私は……こういう方向性のものを、いままで目指していたんですけれど」  
 「フーン、同人誌でやれば？」  
 にべもねえ！ 何コレ、作家つてこんなことばっか言われる仕事なわけ!?!  
 中学生相手に容赦のかけらもないライトニングさんだった。  
 「僕らが作ってる本つてのは商品なんですよ。なのに、そこでカンケーない話されても困るん  
 ですよね。やりたいことがあるなら、それをどうやって売るのが、どうやったら売れるのかと  
 いう相談をしましょう。単なる趣味の話ならプライベートでお友達とやってください」

「……………」  
 黒猫はほとんど表情を動かさなかったが、眉をわずかにひそめ、険を強くしている。  
 内心ではハラワタにえくり返ってるんだろな……。視線に憎悪を感じるもん。